

センターの新研究棟

New Building of LTM Center

澤田安樹

京都大学低温物質科学研究センター

Research Center for Low Temperature and Materials Sciences, Kyoto University

長年の悲願であった低温物質科学研究センターの研究棟ができることになった。本部キャンパスにある工学部7号館を耐震改修して研究棟として使うので、「できる」という表現はあまり相応しくないかもしれない。しかしこれまで理学部などに居候してきたセンター構成員にとっては、マイホーム建設が決まったように嬉しいことである。

毎年のように概算要求を出しては落ちてきたので、センター研究棟は永久に実現しないのではないかと考えていた。しかしながら本部・施設関係者の努力と姉齒事件の効果で、雨アラレのように予算が降り、工学部7号館の他、理学部1号館、5号館もいっぺんに改修されることになってしまった。予算が採択されるのは目出度い限りであるが、いっぺんになると改修中の限られた退避先の争奪戦が始まり、蜂の巣を突いたような大騒ぎとなった。しかしともかく1年凌ぐと、腰を落ち着けて研究できるようになる。

工学部7号館には、耐震改修後、LTMセンターの他、学術情報メディアセンター、地球環境学堂などが入居する。本部・施設整備委員会で教員割当分に相当する基準面積1018平方メートルと、共同利用実験室として加算面積422平方メートルが認められた。この数字だけ見るとかなりゆったりした感じであるが、この面積には廊下、トイレ、パイプスペース、さらにまた耐震改修で厚くなる壁や柱も入っているので、皮の分厚い果物でも食べているようなもので、実質的に利用できる面積はかなり狭い。基準面積は、センター教員が居候から脱却する実験室や居室として割り振った。また加算面積はじゅうぶんではないので、関係教員の割り当て分を供出して何とか必要な面積を確保した。学術情報メディアセンターがスーパーコンピュータの設置場所として借りるスペースが5年後に空くことによって、この加算面積は更に266平方メートル増えることになっている。従って今回積み残した共同利用実験室も5年後には作る事ができる。

共同利用実験室として、クリーンルーム、極低温電子顕微鏡室、顕微鏡室、X線回折装置室、分光・熱分析装置室、磁気共鳴実験室、磁性測定室を作ることになった。これらの実験室は共同利用実験室として大いに利用が期待されるものばかりで、京大全体の低温物質科学研究の大きな発展につながることになる。



図1 工学部7号館。中庭から北を向いて撮影。現在、建築工学専攻が桂地区に移転、耐震改修中の農学部が待避場所として使用している。少々汚い概観であるが、改修後は新築のように光り輝くようにはならないかもしれないが、それなりに美しい建物に蘇ることになる。